荒木田嗣興と『萬葉品類鈔』

和田義一

一

近世江戸期の万葉集研究は契沖や荷田春満・賀茂真淵、さらには橘千蔭らの研究によって進展した。真淵は契沖の実証的方法と春満の直観的・批判的な方法とを統一し、文学としての万葉集の研究に新生面を開いたとされる。『萬葉集考』『冠辞考』は後進を導く大きな指標となった。また、真淵門下の千蔭は『萬葉集略解』で、師真淵をはじめ、契沖・宣長など先人の説を引用しながら全巻に注解を施した。これは平易な全注としてもっとも普及し、近世後期の研究に大きな影響を与えた。万葉集の研究は所謂国学者を中心に大きな進展を見せた。

一方、中国の本草書『本草綱目』が江戸期に渡来し、その和刻本が出版されに及んで、我が国の本草学研究は活況を呈する。とりわけ、本邦の本草学者による本草学書、貝原篤信（益軒）の『大和本草』（宝永六年〈一七〇九〉刊）が刊行されて、本草学は広く普及し、多くの本草学研究書が輩出した。その代表的著作が小野蘭山の『本草綱目啓蒙』（享和三年〈一八〇三〉～文化三年〈一八〇六〉刊）である。『本草綱目啓蒙』は江戸後期の本草学界に大きな影響を与えた。

こうした本草学の普及と発展に伴って、万葉集研究にも新しい研究方法が開拓された。万葉集中の草木鳥獣虫魚介を取り出して、本草学的手法によって品物（ひんぶつ）を研究する方法である。それを万葉集の博物学的研究という意味で、万葉博物学とかりに称している。以下に伊勢の神官荒木田嗣興の生涯とその著書『萬葉品類鈔』が本邦の本草学の影響をどのように蒙っているかについて考察してみたい。

二

荒木田嗣興は文化六年〈一八〇九〉八月五日、伊勢神宮の神官、

中西興之の長男として、宇治常磐町に生まれた。字は錫範、通称衛門、号穆如、夢蘗軒とも称した。父興之は荒木田の姓を名乗る内宮の神官であるが、中西氏は禰宜になることの出来ない、権禰宜で一生を終る家柄であった。嗣興は興之三十五歳の時の子である。長男として生まれたが、中西家は次男の興平が継ぎ、嗣興は外宮の神職、度会姓の龍氏の養子となった。しかし、数年後には龍家を離縁され、同じ外宮神職の幸福家を相続した。嗣興が長男であるにもかかわらず、他家の養子となった理由について、かつて神宮文庫に在職された古川真澄氏は「龍家なり幸福家なりが財政的に余裕があったため」と推測されている。中西家系図[1]には「龍家名跡離縁幸福家相続　皆号一代中西」とあり、嗣興は終生荒木田姓中西氏を称していたらしい。従って、養子は財政的援助を受けるための名目上のものであったかもしれない。「系図」によれば文化十年（五歳）従五位下、同十四年（九歳）従五位上に叙せられている。弟の興平は「系図」によれば「文政十一年三月五日叙」とある。この年、従五位下に叙任されたらしい。従五位下に叙任されるのは、父興之が六歳、兄嗣興が五歳の時である。従って興平もこの年五、六歳であったろう。とすれば興平の出生は文政五、六年頃であろう。そして嗣興が龍家の養子となるのは弟興平が生まれてからのことであるから、文政五、六年頃以降であろう。嗣興は文政八年（十七歳）正五位下に叙せられた。[2] この昇進は龍家名跡を継いでからと考えられる。昇進のためには財政的裏付けが必要であったろう。この時、嗣興は「伯耆」を通称とした。

文政十二年（二十一歳）には嗣興は通称を「伯耆」から「若狭」に改名している。[3] この改名は龍家から離縁し、幸福家名跡を相続したことに起因するのではなかろうか。幸福家は外宮の権禰宜で、所謂御師の家柄である。御師としての幸福一族は、江戸時代中期には幸福出雲、幸福数馬、幸福内匠などが出て、全国の諸大名を檀家としているから、[4] 裕福であったろう。嗣興の著書『鱚鰭考』（神宮文庫蔵）は著者名を幸福嗣興としているから、幸福家相続以後の著述である。しかし、初稿本『萬葉品類鈔』（国会図書館蔵臼井文庫本）の成立は自序によれば文政十年〈一八二七〉であるから幸福家名跡を継ぐ以前である。

慶応四年には正四位上に叙任され、明治二年の「内宮正権禰宜交名」[5]には「中西嗣興　衛門　六十一」とあるから、この時衛門を通称としたらしい。没年は明治十一年〈一八七八〉一月二十三日、享年七十歳である。墓所は宇治山田浦口町天神丘墓地にある。

さて、嗣興は若年の頃から本草学に興味を抱いていた。嗣興と同郷の神主、五百代広治による「萬葉品類鈔序」（初稿本）には「荒木田嗣興神主、稚草ノ甚幼カリケル時ヨリ、奥津藻葉諸ノ書読ム

事ヲ好ミテ、菅根ノ懇ニナモ、磯松ノ勤シミ学バレケル、其ガ中ニモ物産ノ事ヲ主トシテ、嵌樫ノ本ヨリ、真賢木ノ心賢シク座スガ上ニ、撓蔓タユム事ナク学バレケレバ、専ラタドタドシキ事ナクナモ、弥奨ミニ奨マレケル。」（原文は万葉仮名表記で、カタカナの付訓がしてある。これを私的に漢字仮名交じり文に改めた。）とある。自序（初稿本）にも「予自レ幼好二斯道一嘗読二本草及群書一、認二識器材玉石金土草木鳥獣虫魚之形質一、日夜孜孜乎不レ息焉」（返点及び句読点は私的に付す。）と書いている。物産の学、本草学に興味を持ったのには、御師としての家の生業も関係していたであろう。御師は檀家に大麻を配布して報賽を得るのが大きな収入源であったらしいが、檀家への土産物としては暦・帯・白粉・茶・扇子・櫛・海苔・のし鮑・付子（染料）・海人藻（虫下し）・ふのり・墨などが使用された。『萬葉品類鈔』の本文中にも「採薬ニ出ルツイデニ」と書いているように、薬草の採集に山野河川を歩く機会は多かったであろうし、御師として諸国の山野を旅し、各地の動植物を見聞する機会も多かったであろう。

五百代広治の序文によると、文政十年は嗣興二十歳未満であるが、彼の学問は相当の域に達していたという。広治が『品類鈔』の草稿を見せられたのは「此近キ年頃」とあるから、文政八、九年、嗣興十七、八歳の頃のことであろう。広治はこの草稿を見て、彼に清書をすすめる。清書本の校合には広治も助力している。請われて序文を書いたのが文政十年の夏であるという。

『品類鈔』執筆の動機について、嗣興は自序で「竊謂三先哲有二詩経名物之解一、未レ聞レ有二萬葉集名物之解一者、集中所レ詠草木鳥獣蟲魚介金玉服帛造醸器物船具、其名不レ易レ辯者、至多矣。故就二諸家之説一、考二証之一、聊加二吾聞見一而、分二品物部類一、盤二成一書一。名レ之曰二萬葉品類鈔一。」と述べている。「先哲」の「詩経名物之解」とは、『品類鈔』本文中にも引用されている江村如圭の『詩経名物之解』（享保十六〈一七三一〉刊）を指すのであろう。これは『詩経』所出の名物、草木鳥獣魚蟲を考証したものであり、いわゆる本邦の名物学の勃興はここに始まるとされる。[6] 中国古典の博物学書に対し、我が国古典の博物学書を著述するのが嗣興の目的であった。広治もその序文で「萬葉集ニ出タル草木鳥獣昆虫魚介等、又金玉服帛造醸器物船具之類ヲ取リ分キテ注釋シタル書有ルコトノ聞コエヌヲ飽カズ慨ミテ、カクノ類彼ノ集ヨリ抜キイデ」と説明している。万葉集より草木鳥獣虫魚介類を抜き出して注釈を加えたのは嗣興が最初であり、以前には誰も手をつけていないことだという自負がうかがわれる。広治はまた「某巻某枚ト云フ事サヘニ書記シテ、其ノ後ニ説ヲ言ヒテ、諸家ノ説、又漢字何トマデ、委曲カニ書キ集メツル」とも書いている。「萬葉集名物之解」を著述したのは必ず

しも嗣興が最初ではなかったが、伊勢の地にあって、ほぼ独力で著述を継続して来た彼に、この分野では自分が先鞭をつけているのだという自負は当然あったろう。ただ、若年の執筆であったがため、後年、自説の修正、補足が次々と必要になり、自筆本には幾多の加筆、削除の痕跡が見られるのであって、最終的に出版されるのは天保五年〈一八三四〉以降と推定される。初稿本の成立から約七年を費したということである。

本章の最後に荒木田嗣興の年譜と中西家系図とを掲出しておく。ともに、古川氏の調査資料を参考に、私的に作成したものである。

荒木田嗣興年譜

西暦	年号	年齢	事項	備考
一七〇九	宝永六			貝原益軒『大和本草』（巻一～十六）刊
五七	宝暦七			賀茂真淵『冠辞考』刊
六九	明和六			〃『萬葉集考』（巻一・二・別記）刊（～天保十）
九〇	寛政二			本居宣長『古事記伝』刊行始まる（～文政五）
一八〇三	享和三			小野蘭山『本草綱目啓蒙』刊（～文化三）
〇九	文化六		荒木田嗣興生る	
一三	〃十	五	従五位下に叙任	
一五	〃十二			
一七	〃十四	九	従五位上に叙任	小林義兄『萬葉集禽獣虫魚草木考』成立
二二	文政五			『萬葉動植考』著者伊藤多羅没
二三	〃六	十五	弟興平この頃生る	春登『萬葉集名物考』成立
二五	〃八	十七	この頃龍家名跡相続	
二七	〃十	十九	正五位下に叙任。伯耆を称す	鹿持雅澄『萬葉集品物解』（初稿本）成立
	〃〃	〃	父興之没（五十三歳）	
二九	〃十二	二一	伯耆を若狭と改名（幸福名跡相続か）	
			この頃『鰒鰭考』著述	
三四	天保五	二六	『萬葉品類鈔』刊	
四一	〃十二			西門蘭渓『萬葉草木考』成立
六八	慶応四	六十	正四位上に叙任	
六九	明治二	六一	通称を衛門と改名	
七八	〃十一	七十	嗣興没	

(中西家系図)

- 息重　十之允・左近　平右ヱ門
  - 息長　源之允・左治馬　式部（享保十三年十月廿一日任）
  - 息伊　音治郎・右門（享保十七年十月廿七日任　寛延二年七月卒）
  - 息信　市九　妥女（享保十七年十月廿七日任　寛延二年七月卒　年五十五）
    - 成音（盛）（天明四年五月十三日為養子）
    - 興之　元之助（ユキ）（実岡田径邦也　径文男）　左ヱ門（安永四生　安永九・十一・六従五下　同年十二・十・四従五上　同年正・十一・五位下　寛政五・正・十一従四下　文化十・一・廿一従四上　同十四・九・五・十三正四下　文政十卒　歳）
      - 嗣興（ツグ）　伯耆・若狭・衛門（字錫範　号穆如）（龍家名跡離縁幸福家相続　皆号一代中西　文化十年七月五日従五下　同十四・九・廿一従五上）
      - 女（嘉永三年九月廿日死）
      - 興平（ヒラ）　佐渡　弘之助（文政十一年三月五日叙任）
        - 興讓（ヨシ）　権丸
        - 興行（ツラ）　秋若

（注）

（1）元神宮禰宜古川真澄氏の調査による「内宮地下権禰宜家系　一門三四四号」・「内宮権任物忌内人家系　一門三四五号」（ともに神宮文庫蔵）の「中西家系図」を参照。

（2）古川真澄氏調査の「内宮正権禰宜大小内人内外物忌等交名」（神宮文庫蔵）の文政八年の項参照。

（3）（2）の文政十二年の項参照。

（4）『神宮要綱』（昭和四年　神宮皇学館館友会発行）の「江戸時代中期主要師職表」参照。

（5）（2）の明治二年の項参照。

（6）上野益三『日本博物学史』（昭和四十八年　平凡社）の「年表」一七三一年の項参照。

三

『萬葉品類鈔』の諸本九種類について述べる。

1、（自筆稿本）天理図書館蔵本（九一一・二二・イ七九）（七巻。合本一冊）

2、（写本）国会図書館蔵白井文庫本（特一・四四二）（巻一・二の二巻。二冊）

3、（写本）神宮文庫蔵本（三・四五九）（七巻。三冊）

他に昭和写本として二種類ある。

4、（写本）天理図書館蔵村野文庫本（九一一・二二・四七九）（七巻。三冊）

5、（写本）明治大学図書館蔵本（九一一・一二六・一五）（六巻。三冊）

版本としては管見では四種類存在する。

6、（版本）東洋文庫蔵岩崎文庫旧蔵本（Ⅶ・2K6・六三）（七巻。三冊）

7、（版本）東京大学図書館蔵本（E31・一三一六）（7巻。四冊。合本）

8、（版本）甲南女子大学図書館蔵上野文庫本（七巻。四冊）

9、（版本）お茶の水図書館蔵竹柏園文庫本（七巻。四冊）

1は巻之一から巻之七までを合本にした一冊本である。四つ目袋綴。表紙は縦二四・五センチ、横一七・〇センチ。題簽、外題なし。内題は巻七を除いて各巻ともに墨で抹消され（巻序のみ残す）、編者名は切り抜かれている。巻七にのみ「萬葉品類鈔七之巻　正五位下荒木田嗣興識」の内題が残っている。佐佐木信綱は「子孫が他に譲る際のわざか。」と述べている。[1] 第一丁から三丁目までが凡例である。ただし、冒頭の「萬葉品類鈔凡例」という文字は墨滅。三丁

目の末尾に「文政丁亥秋於玉蘭書屋誌」と年記がある。次に目録二丁。これも「萬葉品類鈔」の五文字が墨滅され、単に「目録」の二字のみが残されている。目録は次のようになっている。

一之巻　草部
二之巻　木部
三之巻　鳥部
四之巻　獣部
五之巻　蟲部
六之巻　魚部
七之巻　介部
八之巻　全玉部
九之巻　服帛部
十之巻　造醸部
十一之巻　器物部
十二之巻　船具部
十三之巻　別記

しかし、本文は巻之七介部までである。続いて、本文は一五一丁、その内訳は

巻之一（草部）　五七丁
巻之二（木部）　四七丁
巻之三（鳥部）　二五丁
巻之四（獣部）　九丁
巻之五（蟲部）　六丁
巻之六（魚部）　四丁
巻之七（介部）　三丁

である。本文一面九～十二行、一行の字数は不定であるが、二〇字～三〇字程度である。本文も朱・白・黒墨による加筆・訂正や、貼紙、符箋による訂正が多い。3で使用されている、柱に「夢蝶軒蔵」の印記のある罫紙でさし替えられている丁もある。巻一・二は文政十年に一応の原稿が成立してからも丹念に修正がくり返されたらしく、特に加筆・訂正が多い。凡例の第一丁に「岡田眞之蔵書」の印がある。本書は大島雅太郎氏旧蔵、現天理図書館所蔵となっている。

2は巻二（木部）までの浄書本である。四つ目袋綴。表紙は縦二四・六センチ、横一六・六センチ、左端に題簽「萬葉品類鈔草部一」「萬葉品類鈔木部二」とそれぞれある。内題は「萬葉品類鈔巻之一正五位下荒木田嗣興識」とある。巻二も同じ。最初に五百代廣治の「萬葉品類鈔序」（三丁）、次に、嗣興の「萬葉品類鈔自叙」（四丁）、「萬葉品類抄凡例」（三丁）、「萬葉品類抄目録」（二丁）と続く。本文は巻之一、五九丁、巻之二、四七丁で、一面一〇行、一行の字数は不定である。ただし、「序」は一面八行、一行一八字、既述のように万葉仮名表記（片仮名傍訓）で書かれ、「自叙」は一面五行、一行七字の漢文体で書かれている。「自叙」の末尾には「文政丁亥夏書于夢蝶軒　正五位下荒木田嗣興」と年記があり、その横に「荒木田姓中西氏章」と「荒木田嗣興」の印記がある。

「凡例」は二四項目あるが、その第二項目に「此書今草木鳥獣昆蟲魚介ノ如キヲ初巻ニ出シ金玉服帛造醸器物船具ノ類ヲ後巻ニ出ス

事目録ノ次第ノ如シ」とある。初巻は草・木・鳥・獣・昆蟲・魚・介の七部、後巻は金玉・服帛・造醸・器物・船具の五部、それに別記一巻を付載するのが最初の構想であった。それが自筆稿本も版本も第七巻介部で終っているから「後巻」は結局書かれずに終った。「別記」も書かれることはなかったようだ。

廣治の「序」の終りの方に「此程草木之巻ヲ清ラニ書キ終ヘヌ、同ジクハ是ガ始メニ一言書キテ、ト乞ハレケルニ」と、序文を依頼された経緯が記されている。本書は第二巻まで完了した段階での清書本と考えてよいであろう。第一冊目、二冊目の巻頭の第一丁にはそれぞれ「五百代」の印記がある。この二冊は序文を書いた五百代が所有していたのであろう。廣治は序文によれば嗣興と同郷で、しかも嗣興より年上であったらしいが、その序文に祝詞風の修辞句が多いことから、神職であったらしいことが推定される。本書は「白井氏蔵書」の印記があり、明治・大正年代の植物学者白井光太郎〈一八六三～一九三二〉の旧蔵書である。

3は巻一より巻七までの写本である。四つ目袋綴の三冊本である。表紙は縦二三・八センチ、横一六・四センチ、左端に題簽「萬葉品類鈔一」とある。内題は「萬葉品類抄巻之一　正五位下荒木田嗣興識」とある。第二冊目も題簽、内題は同じ、第三冊目は題簽「萬葉品類鈔三之七」、内題は冒頭の第一枚目に「萬葉品類抄巻之三　正五位下荒木田嗣興識」とあり、以下、巻四・五・六・七まで、それぞれ巻ごとに内題がある。

第一冊目は自序（四丁）、廣治序（三丁）、凡例（四丁）、目録（二丁）の順に綴じられている。2に較べて、自序と廣治序の綴じ順が入れ代わっている。廣治序の文末には「時ハ文政ノ十年ト云フ年ノ五月」と年記が入っているから、本書の清書の完了は「文政十年五月」であったことがわかる。そして、自序の文末の印記は「夢蝶軒竜氏記」「嗣興之印」と変わっている。この当時は幸福家相続以前、竜家の人であったらしい。

凡例と本文の用紙は四周双辺枠の罫紙を使用している。一面一〇行、柱には上部に「萬葉品類鈔」と記入され、その下に巻数・丁付、最下部に「夢蝶軒蔵」と記入されている。

2は廣治がその序文で述べているように、巻二までの清書本であるのに対し、本書は巻七まで書き継がれているから、2より以後の写本である。見出し項目も二項目増加しているし、本文の内容も2より整理されている。また、2の頭注には「別記ノ中ニ委シク云フベシ」というのが多く散見されたが、本書では「別記」の語句は多く削除されている。頭注そのものが本文に組み込まれている個所が多い。「別記」執筆の予定は本書書写の段階ではもうなくなっていたのかもしれない。しかし、「目録」は2と全く同じである。

各巻の本文の見出し項目数と丁付を次に掲出する。

（第一冊）巻之一（草部）一九三項目　六三丁
（第二冊）巻之二（木部）一四八項目　六二丁
（第三冊）巻之三（鳥部）一〇一項目　二六丁
巻之四（獣部）三一項目　一〇丁
巻之五（蟲部）一八項目　七丁
巻之六（魚部）一六項目　五丁
巻之七（介部）一一項目　三丁
合計　五一八項目　一七六丁

以上である。

4は昭和年代の写本である。三冊目の巻末跋には次のように記されている。

萬葉品類鈔三冊神宮文庫の藏書なり
宇治山田市伊藤武夫氏を介して同氏の知人に頼み謄写す
昭和六年七月十五日　村野時哉

形式・内容ともに3を忠実に写した、本文のみの写本である。

5も昭和写本である。第三冊目の巻末跋には次のように記されている。

萬葉品類鈔三冊
右原本神宮文庫蔵本也今名古屋
村野時哉氏藏書の謄本を以て写す
昭和八年五月八日　楽只園主人

「楽只園主人」とは『萬葉集草木考』（昭和七年　建設社刊）の著者岡不崩（本名吉寿）のことである。本書は第三冊目の巻之四「鳥部」を欠く。

6以下は版本である。6は四つ目袋綴。表紙は縦二一・八センチ、横一五・一センチ。第一冊目の題簽は表紙左端に、「萬葉品類鈔草部一」とあり、内題は「萬葉品類鈔一之巻　正五位下荒木田神主嗣興識」とある。本書には廣治序、自序、凡例、目録等一切ない。用紙は3の本文と同じ「夢蝶軒蔵」の罫紙を使用している。本文は八四丁である。各丁に番号が付いていて、十二下、十三下、四〇下がそれぞれ加丁されているので、通し番号としては八一丁であるが、実際は八四丁である。第二冊目は題簽は「萬葉品類鈔木部二」とあり、内題は第一冊目に準ずる。本文七三丁である。第三冊目は題簽「萬葉品類鈔鳥獣蟲魚介部三」とあり、内題は第一冊に準ずる。本文は

三之巻鳥部　三六丁
四之巻獣部　一三丁
五之巻蟲部　九丁
六之巻魚部　六丁
七之巻介部　四丁

計　六八丁

である。各冊とも第一丁、内題の下方に「榊原家蔵」の印記があり、本文の上方欄外に「木村正辞図書」の印記がある。本書は既述のように、序文、凡例、目録等なく、紙の判型も7・8・9に比してやや小型である。本文だけを再製本したそのためにやや小型になったものか。また、誤植も多く、それらは7・8・9において大略訂正されているので、7・8・9より前に印刷されたものと考えられる。初版本であろう。

7は四冊本を合本したものである。四つ目袋綴。縦二五・五センチ、横一七・〇センチ。題簽は表紙左端に「萬葉品類鈔草一」とあり、内題「萬葉品類鈔一之巻　正五位下荒木田嗣興」とある。用紙は6に同じ。第一冊目の丁付は、廣治序三丁、自序四丁、凡例四丁、目録二丁、本文八四丁である。十二丁、十三丁、四十丁が6と同じようにそれぞれ一丁加丁されているので表示番号は八十一丁である。第二冊は題簽、内題は第一冊目に準ずる。本文は木部七三丁である。廿丁が一丁加丁されているので、表示番号は七十二丁である。第三冊の題簽、内題も第一冊目に準ずる。本文は鳥部三六丁である。第四冊の題簽は「萬葉品類鈔獣蟲自四魚介至七」とあり、内題は各巻ごとにある。本文丁付は、

四之巻　獣部　一三丁
五之巻　蟲部　九丁
六之巻　魚部　六丁
七之巻　介部　四丁

である。本書の第四冊目後表紙裏側（見返し）には「印行千世限弐百部」「聊待賞音不許賣買」とある。夢蝶軒の蔵版で、百部の限定出版であり、売買を許さないとは、つまり、販売が目的ではないということであろう。同じ後表紙裏打紙の中に墨書した紙片があり、それには「西村廣休遺書　明治廿三年八月求ム」と記されている。本書の第一冊目の表紙の裏側には「男爵田中美津男氏寄贈　先代田中芳男男旧蔵書　昭和七年」の印記がある。本書は西村廣休（文政十三年〈一八一六〉～明治二十二年〈一八八九〉）から田中芳男（天保九年〈一八三八〉～大正五年〈一九一六〉）の手に渡ったものらしい。西村廣休は伊勢国多紀郡相可村の富豪（呉服・両替商）で、幕末の本草学者でもあった。岩崎常正の『本草図譜』（九六巻、文政十一年〈一八二六〉成立）の出版（天保元年〈一八三〇〉～弘化元年〈一八四四〉）の蔭の援助者と言われる。また、田中芳男は名古屋の博物会（嘗百社）の若手メンバーの一人であり、明治前半期の博物学界のリーダーの一人であった。

8は上野益三氏の旧蔵書である。四冊本。四つ目袋綴。縦二五・三センチ、横一六・八センチ。第一冊目の表紙見返しに「伊勢国竜

家蔵　萬葉品類鈔　天保五年甲午春発兌」と三行書の印字がある。従って、版本の刊行は天保五年〈一八三四〉とされる。[2] 第四冊の後表紙見返しには7と同じく「印行千世限弐百部」「聊待賞音不許賣買」の印字が見える。その他用紙の体裁、書式の形式、及び本文巻・丁付等は7に同じ。本書は嗣興の養家竜氏に保存されたものらしい。

9は佐佐木信綱の旧蔵書である。8の第一冊の表紙見返しの「伊勢国竜家……」の印字はない。他は全く8に同じである。

〈注〉

（1）佐佐木信綱著『萬葉集事典』（昭和四十九年　平凡社刊）「典籍篇」の「考証――博物」の項参照。

（2）版本巻之二「黄葉（モミヂ）」の項に「山口栞（若狭ノ僧義門著）ト云フ書ニ委シク見エタリ」という一文がある。東條義門（天明六年〈一七八六〉～天保一四年〈一八四三〉）の『山口栞』の刊行は天保七年であるが、初稿本の成立は文政元年〈一八一八〉であり、その写本が神宮文庫に所蔵されている。この写本は足代弘訓（天明四年〈一七八四〉～安政三年〈一八五六〉）の手拓本である。（三木幸信編『義門研究資料集成　上』（昭和四十一年　風間書房刊）参照。）嗣興はこの初稿本の写本などを閲覧していたのであろう。『日本博物学史』は版本の刊行を天保五年とする。

四

『萬葉品類鈔』諸本の比較を通して各本の特徴を以下に考えてみたい。

嗣興は巻頭の「凡例」で見出し項目について「凡テ同物モ書（カケ）ル字異（モチカハ）レルハコト〳〵ク出タル限（カギ）リヲ擧（ア）グ　譬ヘバ鳥梅能半奈五ノ十九丁有米能波奈五ノ十九丁鳥梅能波奈五ノ十九丁ナド擧クルガ如シ」と述べている。同一品物でも表記法が異なればすべて列挙するという。版本の凡例では「凡テ品物ヲ擧グル次第先ヅ假名書（カナガキ）ヲ擧グベキナレドモ見ヤスカラムタメ本字ヲ先ヅ擧（ア）ゲテ假名書ヲ次トス」と述べている。ここでいう「本字」とは漢字の正訓字表記を指し、「假名書（カナガキ）」とは一字一音の音仮名や訓仮名を指すと考えられる。「本字」を先に「假名書」を次とする掲載方針は、白井本や神宮本ではまだ明確に確立されていないが、基本的にはその方針で統一されている。（各品物の最初に掲載している表記のものをその品物の見出し項目として、私的に各巻ごとの通し番号を付してみた。それが末尾の付表（三）「掲載項目目録」の「見出し項目」の上にある番号である。）

まず各本によって掲載項目に多少の異同がある。それを表にまとめたのが付表（一）の「『萬葉品類鈔』掲載項目比較表」である。

付表（一）

『万葉品類鈔』掲載項目比較表（算用数字は各巻ごとの通し番号）

	白井本	神宮本	版本	自筆本
（巻一）	89 月草	89 月草	89 月草	89 月草
			90 角(ツヌ)	
	90 土針	90 土針	91 土針	90 土針
	109 似兒草	109 似兒草	110 似兒草	109 似兒草
	110 和海藻(ニキメ)	110 和海藻	（187「ワカメ」の項へ）	110 和海藻
	111 庭草	111 庭草	111 庭草	111 庭草
	164 麥(ムギ)	164 麥	164 麥	164 麥
			165 牟浪多麻(ムラタマ)	165 牟浪多麻
	165 軍布(メ)	165 軍布	166 軍布	165 軍布
（計）	一九三種	一九三種	一九四種	一九四種
（巻二）	33 蝦手(カヘデ)	33 蝦手	33 蝦手	33 蝦手
		34 神樹(カミキ)	34 神樹	34 神樹
	34 神杦(カミスギ)	35 神杉	35 神杉	35 神杉
	59 小歴木(シバ)	60 小歴木	60 小歴木	60 小歴木
			61 楚(シモト)	
	60 白杜枝枝(シラガシノエダ)	61 白杜枝枝	62 白杜枝枝	61 白杜枝枝
	139 弓絃葉(ユヅルハ)	140 弓絃葉	141 弓絃葉	140 弓絃葉
		141 弓槻(ユツキ)	142 弓槻	141 弓槻
	140 湯小竹(ユサヽ)	142 湯小竹	143 湯小竹	142 湯小竹
（計）	一四六種	一四八種	一四九種	一四八種
（巻三）		一〇一種	一〇一種	一〇一種
（巻四）			1 青馬	1 青馬
		1 青駒	2 青駒	2 青駒
		2 赤駒	3 赤駒	3 赤駒
		24 放駒(ハナチゴマ)	25 放駒	25 放駒
			26 臥鹿(フスシカ)	
		25 布都麻(フツマ)	27 布都麻	26 布都麻
（計）		三一種	三三種	三二種
（巻五）		一八種	一八種	一八種
（巻六）		一六種	一六種	一六種
（巻七）		一一種	一一種	一一種
総計	三三九種	五一八種	五二二種	五二〇種

巻一では、白井文庫本、神宮文庫本に相異はない、神宮本と版本では、版本が90角、165牟浪多麻の二項目の増加がある。しかし、神宮本110和海藻を版本では187「和可米」の項に含めたため一項目減少し、合計では差し引き一項目の増加となっている。ただし、自筆本は版本の90角は神宮本・白井本に同じ、165牟浪多麻は版本に同じである。

巻二では、神宮本34神樹、141弓槻の二項目が白井本より増加している。「神樹」は白井本では「神樹」と訓んで「賢木」の項に含めていた。それを神宮本で一項目別立てにした。その理由を嗣興は「今本ニサカキト訓ムハワロシ　カミキト訓ムベシ　宣長云サカキト訓ミテハ只山ニアル榊ニマガヒテ此歌ニ叶ハズト云ヘリ　此説マコトニ然リトゾ思フ　俗ニ神木ト云フ意ナリ歌ノ意ヲ考フベシ」と述べている。「今本」とは当時流布していた寛永版本であろう。嗣興は宣長説に従ったと述べている。宣長は『古事記傳四十一之巻』で萬葉集巻四（五一七）の歌を「神樹爾毛手者触云乎」と訓んでいる。[1]

嗣興が宣長説を重視する傾向は実は巻一にも見られる。白井本・神宮本で110和海藻をワカメと別立てにしているが、これも宣長説によってである。白井本・神宮本には「今本訓ニワカメトアリ」と述べられているが、どうして「和海藻」を「ニギメ」と訓んで「ワカメ」と別立てにしたのかの理由は述べられていない。そして、版本では110和海藻の項を削除し「和海藻」を「ワカメ」と訓んで、187和可米の項に含めてしまった。しかし、「和海藻」を「ニキメ」と訓むことへの未練はまだあったようだ。版本で始めて「宣長はニギメト訓ム其説古事記傳ニ委ク見ユ」と説明しているからである。[2]

これに対して、真淵にはやや批判的である。神宮本で141弓槻を新しい項目として立ててるが、「ユツキハ弓ニ作ル槻ナリ　真淵ノ五百槻ナリト云ヘルハ非ナリ」と述べている。

巻二では、その他に、版本で61楚が増加している。これについては特に理由が記されていない。「シモトハ木ノ細枝ナリ上ノ於布之毛等ノ條ヲ考フベシ」とあるのみである。自筆本・白井本・神宮本は同じである。

巻三では諸本に項目数の増減はない。

巻四では版本で1青馬、26臥鹿を新しい項目に立てている。1青馬は神宮本では1青駒に含めていたものである。

巻五・六・七においても項目数の増減はない。

掲載項目の増減は以上である。見出し項目と同じ品物で、表記の異なるものは全部列挙するのが嗣興の編輯方針で、それらの小項目は見出し項目の次に記載されている（付表（三）では省略）が、それらも本によって補充している例がいくらか見られる。白井本で十分網羅し切れなかったものを神宮本で補充している例として、巻一172

山菅で「山草・夜麻須氣」を補充し、巻二41木で「樹」を、121松の小項目「松枝」で「松之枝」を、137柳で小項目「柳之宇禮」を補充しているのなどがある。また、版本で補充している例としては巻一191女郎花で「娘子部四」を加えているのが挙げられる。

本文の記述内容も本によって異なりを見せる。白井本は神宮本や版本に比較すると表現や記述内容に不備な点が多い。神宮本ではかなりの修正がなされている。巻一では1菖蒲・2味狭藍・16青角髪・42容花（頭注）・72知草・107七重花などがそれで、記述が修正・加筆され、より詳細になっている。白井本執筆当時よりは知見も進んだ結果の改訂であろう。巻二では13五十槻枝・25榎賀・33蝦手・63椎・103波播蘇葉・134毛知などがそれである。特に103・134については単なる加筆・修正の域を越えた全面改訂であり、内容も長文化し、詳密化している。例えば134では「モチノキハ汝南圃史ノ細葉冬青ト云フモノナリ」「蘭山云粘稠ノ字粘黏ニ作ルベシト云ヘリ」などと、中国本草書『汝南圃史』や本邦の本草家小野蘭山の名前を挙げるなどして、本草書の体裁を取繕おうとしている。反対に不必要と認められる個所は省略し、簡略化している。巻一の9秋芽子・179百合・巻二52賢木・136柳などがそれである。

ところで、神宮本の凡例に「此書中諸家ノ説ヲアグルニ姓名ヲ書スベキ事ナレドモ今ハ或号或名ヲ書ス　ソハ見ル人ノ早クサトリヤスカランタメナリ」とある。これは白井本の凡例にはなかった条項であり、神宮本では、白井本で姓で記している人名を「或号或名」に書き直している。例えば「貝原」を「篤信」に、「松岡」を「恕菴」に改めているのなどがそれである。

また、記述内容の改変に伴って「諸家ノ説」が削除されたり、新しく加筆されたりということも当然あり得る。巻一2味狭藍では和名抄の引用が削除され、代わりに『秘伝花鏡』が引用され、巻二33蝦手では岩崎常正の所説が削除されている。常正の所説引用は彼の著書『救荒本草通解』からであるが、余りにもストレートな丸写しでもって記述全体を占めているために改変されたのであろう。その他、人名で記してあるものを「先輩」「或人」と改変している例も見受けられる。この傾向は版本になると特に顕著になる。

右以外では、文字・語句の誤脱の訂正や巻数・丁付の誤脱の訂正もある。文字・語句の訂正は三十数個所、巻・丁の訂正は二十数個所に及ぶ。

白井本は神宮本に比して誤脱も多く、本文の文章も稚拙であり、内容も和名抄や諸家の説を引用するだけで、自説の開陳や考証が十分展開されていない。それに比し、神宮本は白井本を改訂することで内容は精細になり、品物の特色もかなり明確に記述されている。

白井本は巻一・二の二巻のみであり、全巻完結までの過程で成立した一種の未定稿であったとも言えよう。

次に神宮本と版本東洋文庫本（以下「東洋本」と略称する）の内容を比較する。東洋本は版本であり、出版に際してさらなる改訂がなされたために神宮本に比して、相異点も多い。

東洋本の改訂において特に注意されるのは次の二点である。一つは「諸家ノ説」の引用が多く削除されていること、もう一つは品物の各地方における呼称（方言）の記載を極力削除していること、この二点である。例えば、巻一・20伊都藻之花（イフモノハナ）の神宮本の本文は「千蔭云……ト云ヘリ　八雲（御）抄ニモ……トアリ　蘭山云……ト云ヘリ　按ズルニ本草ニ水藻ヲ二種ニ分カツ　一ハ聚藻フサモ（江州方言）キンギョモス、モ（土州方言）ト云フモノニテ流水ノ底ニ生ジ水ニ随ヒ靡キ流ル、事長シ　葉ハ蓬子菜（カハラマツバ）ノ如クニ二月五辯ノ白キ花咲ク　其一ハ馬藻ニテヤナギモサ、モト云フモノナリ　溝濵流水中ニ多シ」とあるのを、東洋本では千蔭説・蘭山説を削除し、「按スルニ」以下の文中の江州方言・土州方言を削除している。「按」とあるが、「按ズルニ」以下の文章は蘭山『本草綱目啓蒙』（巻十五）の全面的な受け売りである。嗣興の考証ではない。その部分を削除したのである。方言だけを削除している例としては巻一・22石乍（イハツフジ）自の仙台方言、紀伊方言、伊賀方言を削除している例などが挙げられる。仙台・紀伊・伊賀の方言は実はこれらも『啓蒙』（巻之十三）に所載のものである。『啓蒙』は本文の最初に各地の方言を記載するのがその叙述の形式である。「蘭山云」ということわりがなくても、『品類鈔』所載の方言は『啓蒙』によっていることが多い。蘭山の受け売りである方言の記載を版本で削除しているのである。

蘭山の『啓蒙』に方言の記載が多いことはつとに言われている。杉本つとむ氏は『啓蒙』所載の方言を約一万語と推定され、『啓蒙』は全国方言辞典としての性格をも兼ねていると述べられている。[3] また、木村陽二郎氏は蘭山が幕命により江戸へ移住した（寛政十一年〈一七九九〉三月）ことの利点の一つに、全国から弟子が集まり、名声とともに情報が得られたこと、したがって動植物の地方名がより明らかとなったことを指摘されている。[4] 確かに『啓蒙』は膨大な方言名を記載し、大場秀章氏が言う如く「本草学のみならず、江戸時代の地方における植物への関心、植物民俗学、国語学にとって不朽の価値をもつ超一級の資料」[5]であるけれども、『啓蒙』が『重修本草綱目啓蒙』（弘化元年〈一八四四〉刊）、『重訂本草綱目啓蒙』（弘化四年刊）と改訂版が出される都度、手が加えられているのはおもにこの名称の異同に関する部分であったことも考慮されるべきであろう。蘭山は江戸出府後も幕命を奉じて、採薬旅行に六度出か

けている。しかし、全国を巡回することは晩年の蘭山にとって不可能である。植物方言の採取にしても、独力でなすには自ずから限界があろう。いきおい、二次情報に頼らざるを得ないが、そこには不確実要素が入り込む余地も多かったであろう。今日のように機器の発達していない当時にあって、正確な方言の採集は相当困難であったろう。蘭山の死後、『重修』、『重訂』と改版されるごとに門下生達による植物方言の訂正がなされたのも当然であろう。

嗣興は白井本・神宮本で蘭山説を引用するに際し、方言をも同時に引用した。また、蘭山名を明記せずに、『啓蒙』の方言を記載している場合もある。それらの多くが版本では削除されたのである。嗣興自身、伊勢の御師という職業がら、全国各地を旅行する機会は多かっただろうし、また、採薬のために山野に出かけることも多かっただろうが、蘭山のように植物方言を採取する機会にはあまり恵まれていなかっただろう。それが『啓蒙』所載の方言に惹かれた理由であり、また、出版に際して削除したのは、それが『啓蒙』の丸写しであることを憚ったからではなかろうか。

方言の削除は「諸家ノ説」の削除と関連している場合が多いが、方言の記載と無関係に「諸家ノ説」が削除されている場合も多い。例えば、「篤信蘭山両家ノ説モオモヒクサハ龍膽ノ事ナリト云ヘリ」（巻一・37思草）とあるのを全文削除している。千蔭や篤信、蘭山といった著名な諸家の説を引用するのは、一つには参考にし、自説に代える意図もあったであろうが、先にあげた巻一・20伊都藻之花の例のように「千蔭云……蘭山云……按ズルニ」といった形式で叙述されている場合の「千蔭説」「蘭山説」は叙述内容を権威づけるという意図もあったのではなかろうか。しかし、篤信・千蔭・蘭山等の説が、宣長や真淵の説同様広く流布し、所謂「諸家ノ説」に対する批判もすでに云云されているとしたならば、「諸家ノ説」の引用によって自説を権威づける必要性はもうなかったであろう。神宮本成立（文政十年）から版本出版（天保五年）までの約七年の歳月の経過は嗣興自身の本草学に対する知識を深めさせ、広凡な視野をも与えていたであろうし、本草学界の状況も大きく変わりつつあったであろう。嗣興は蘭山説を客観的に批判できる領域にまで成長していた。事実、東洋本には蘭山に批判的な言説も見られる。巻一・91土針では「蘭山ハ王孫ヲツクバネサウニ当テタレドオボツカナシ」と言い切っている。

白井本から神宮本への改訂で「諸家」の人名を「先輩」「或人」などと改変している例があることは既述した。この傾向は神宮本から版本への改訂では顕著になる。具体的な書名・人名を削除し、あるいは「或書」「或説」「先輩」「或人」と言い換える改変である。

神宮本の巻二・31櫻皮で「蘭山云ハク此木凡テ東ノ国ニハ多シ西

南ノ国ニハ無シト云云」とあるのを東洋本で「今按フニコノ木スベテ東北ノ国ニハ多ク西南ノ国ニハ無キモノナリ」と「蘭山」の名を削除し、巻二・32川楊では「恕菴」の名を削除している。ただし、内容はそのまま蘭山説、恕菴説を残存させている。それは宣長説にも見られる。巻二・30楓では「宣長云……ト云ヘリ」と『記伝』（十三之巻）が引用されているが、東洋本では「宣長」の人名を削除して、記伝を踏まえた既述が残されている。

これに対して、巻二・54左宿木花では「岩崎常正救荒本草通解ニ……ト云ヘリ」を「或人ノ説ニ」と改変し、巻二・100波禰受では「千蔭」を「或説」と改変し、巻二・70橘では「蘭山」を「先輩」と改変している。国学者橘枝直・千蔭や本草家貝原益軒・岩崎常正を「或人」「或説」と改変し、蘭山については「先輩」と改変している。蘭山を「先輩」と言い換えるのは蘭山説を批判する場合に多く見られる。神宮本に比して、東洋本では人名や書名の明示を控える傾向が強いが、それは特に蘭山の場合に顕著である。蘭山の人名・書名は神宮本全体で二六個所に見られるのに対して東洋本では一六個所に減少している。（下表参照）

岩崎常正の二個所が皆無になっているのは例外的としても、松岡玄達・江村如圭も減少しているが、特に引用回数の多かった蘭山が約六二パーセントに減じているのが目立つ。そして、東洋本では、

付表（二）

主要本草書・本草家引用回数の比較

人名・書名（本草綱目を除く）	神宮本	東洋本
小野蘭山	26	16
貝原篤信	8	6
救荒本草	7	7
松岡玄達	4	1
江村如圭	4	1
岩崎常正	2	0
救荒野譜	2	3
秘伝花鏡	2	2
平賀鳩渓	2	2
或人・書・説	20	37
先輩	1	4
	21	41

「或人」「或説」「或書」や「先輩」が増加している。この数は本草学者の他に真淵・宣長や千蔭といった国学者をも含めての総数であるが、二一回から四一回に増加している。ほぼ倍増である。

具体的人名・書名を避けたのは、諸家の人名や説を引用すること

で自説を権威づける必要性はもはやなかったが、さりとて、人名・書名を表に出してその当否を論ずることは礼を失するという判断からであろうか。京の市井の学者から幕府御用の学者に出世し、その権威を誇り、没後も名声の高い蘭山を名指しで批判することは憚られたであろう。まして、「蘭山」という人名や書名を表に出さなくても、蘭山説に依拠した本文が相当数残っている場合には一層そうであろう。

このように蘭山説批判は徹底していないけれども、産地や方言の記述に多くのスペースをさいている『啓蒙』的記述から何とか脱却し、できるだけ品物の特徴を精確に記述しようとする方向への改訂が東洋本ではなされている。そして、それは本草書にある植物図などを重視し、品物の同定に役立てようとする傾向と相まっている。例えば、巻二105波自由美で、和名抄が「黄櫨」に「波迩之」の和名をあてるのは誤りであるとしている。神宮本では「穏ナラヌ字也」とあるのを東洋本では「ハニシハ即ハジノキノコトナレドモ黄櫨ノ字ヲ用フルハ誤ナリ」と断定している。その根拠を『救荒本草』所載の「黄櫨」図版に求めている。「救荒本草ニ図アリ　ハジノキノ類ニアラズ」という。ハジノキは「山中ニ多シ、俗ニハゼウルシ又ヤマウルシト呼ブ」もので、これは実から蝋燭を作るものとして、当時よく知られていた。平常見なれているハジノキは『救荒本草』の「黄櫨」の図版とは異なっている。従って、「ハゼ」つまり「ハニシ」を「黄櫨」の和名とするのは誤りだと結論した。ここには図版を重視する姿勢がうかがわれる。

ところで、巻三以降は鳥・獣・蟲・魚・介といった動物類である。江戸期の本草学は草木に関しては研究に従事する本草家も多く、出版物も国外、主として中国より渡来の本草書、それの和刻本、また、本邦の本草家による著書や刊本も多く、それなりの盛況を呈していた。しかし、動物関係の刊本は植物関係のそれよりはるかに数が少ない。[6] 当然ながら、『品類鈔』の巻三から巻七にかけての諸巻における引用参考書は巻一・二に比してその種類が著しく少ない。主として、『和名抄』、『本草綱目』と蘭山の著書に依拠して著述が進められている。記述内容は嗣興自身の考証よりは、諸説の単なる紹介に終始している観がある。

動物関係の巻々の中では巻三は比較的本文改変が多い。諸家の人名の改変（削除・言い換え）は巻二で顕著であったが、巻三においても見られる。「蘭山」を削除し（16大鳥）また、「先猟」と言い換える（14鷃）など例も多い。しかし、「蘭山」を削除していても、神宮本で引用している蘭山説の一部を残存させ、また、神宮本引用の文章に酷似した文章に改変されている場合もあって、要するに蘭山説のストレートな引用を避けただけと見られる改変も多い。逆に、

『本草綱目』の引用文を蘭山の『啓蒙』からの引用文にさしかえたり（49鷹）、「蘭山ノ云ヘルニ……」と蘭山説を加筆したり（96呼兒鳥）もしているから、巻三以降ではまだまだ蘭山に依存し、蘭山の影響を受けているようである。

しかし、嗣興がただ啓斎の考証家に終始したのではないことは「コノ鳥ヲ或時山人ノトレルヲ見シニ」（東洋本巻二・24容鳥）「或時吾里近キ山里人何トカヤ薬ニストテトレルヲ見シニ」（神宮本巻二・75雀公鳥）などの文言によって推察できる。あくまで実地の経験、観察を土台に記述しようとしていたのも事実である。

巻四から巻七までの巻々における本文改訂は比較的少ない。巻五の蘭山説の引用の削除（3川津）、巻六の『啓蒙』（巻之四十）の全面的な丸写しを縮約した（12氷魚）のとの二例が主なものである。神宮本の執筆から、版本までの期間において、嗣興の知見はこの領域ではそれほどの進歩を見せなかったということであろう。

次に版本四種類を比較してみる。東洋本と東京大学図書館本を比較してみると、見出し項目には異同がないが、本文の記述内容にはやはり相異がある。東大本、上野文庫本、竹柏園文庫本の三本には異同がないから、この三本は同一の版木で印刷したものと思われる。ただし、東大本の表紙は他と異なっているから伝来の間に綴じ直しなどがあったと思われる。ここでは東洋本と東大本の本文の相異について述べる。

巻一では本文の内容において、東洋本と東大本との間に大きな相異は見られない。語句の部分的修正が見られる程度である。ただ、啓名・人名の改変が七個所見られる。「千蔭」（82田草）、「鳩渓説」（133日賀菅原）がそれぞれ啓名『萬葉集略解』、『物類品隲』に改変されている。ただし、「千蔭ノ説」（124濱荻）を「或人ノ説」に改変している個所もある。「蘭山」は三個所（91土針・113蓐・125花勝見）にあり、それぞれ「先輩」、「或人」（二回）に改変され、啓名『本草啓蒙』（192乎等古乎美奈能波奈）は「先輩ノ説」に改変されている。「蘭山」という人名や彼の具体的啓名を「先輩」などに言い換える傾向は東洋本の改訂でも見られたが、東大本改訂では東洋本に残存するものをさらに改変しようとしている。蘭山を「先輩」として敬意を表しながらも、蘭山説を批判的に見ようとする傾向は依然として強いものがある。例えば、「本草啓蒙ニハ……トスルハイカヾ」（192）とあるのを「先輩ノ説ニ……トスルハ非ナリ」と断定的に言い換えている。

白井本・神宮本に多かった欄外頭注は東洋本では本文に組み込まれたり、削除されることが多かった。従って、版本では頭注は少ないが、東洋本と東大本の頭注の相異点について見るに、東洋本にあっ

て東大本にはない頭注が一個所（110似兒草）、東洋本になくて東大本に加えられている頭注が一個所（122延都多）ある。前者は漢字平仮名交り文で記されているので、著者以外の人の補筆であろう。その他の改変として、万葉集所載巻・丁付の訂正が一〇個所、語句・文字・仮名遣いなどの訂正が二八個所ある。東洋本は板刻の際の誤りと見られるものが多く、その大部分が東大本では修正されている。東洋本よりも東大本の本文の方が信頼できる。東大本は東洋本の後に板刻された本と推定される。

次に巻二を比較する。本文の内容の相異個所は一三個所ある。そのうち四個所（40栢・44毛桃・93棗・141弓弦葉）は蘭山説の全面削除であり、残る三個所（33蝦手・71橘・101波禰受）はほぼ全文にわたる改訂である。この三項目は江戸期において諸説があり、嗣興も簡単に結論を引き出せなかった。特に、71・101は東洋本で全面改訂をし、さらに東大本で大改訂をした。東大本で説く所が嗣興の最終結論である。71では宣長・蘭山の所説の誤りを指摘しているのが注目される。101は古来より諸説があったが、今日では「ニワウメ」が定説になっている。これについても諸説を紹介している点が今日でも参考になる。嗣興の結論は今日においても通用する所説である。

人名・書名の改変は、本文改訂に伴って、人名・書名が削除、あるいは添加されている個所を別にして一五個所ある。そのうち「蘭山」を「先輩」に改変している例が二個所（135・140）、蘭山の著書『蓋筵小讃』を「先輩ノ説」に改変し、また削除している例がそれぞれ一個所ある。ここでも蘭山説からの脱却の傾向は強い。ところが、巻二で注意されるのは、「或人」「或説」「或書」が再び具体的人名・書名に変えられている個所が存することである。例えば、「或人」を「橘枝直」（8）や「篤信」（139）に改め、「或説」を「千蔭説」（101）に改め、「或書」を「古今集栄雅抄」（8）や「恕菴ノ説」に改めているのなどがそれである。神宮本や東洋本で具体的人名・書名を伏せたのが復活しているのである。真淵・宣長説がそうであるように、千蔭説や平賀源内・貝原篤信説などは広く流布し、名を伏せる必要はなくなり、むしろ、それらの諸説の引用であることを明示する必要性を考えたのかもしれない。自説と他説を明確に区別することによって論証も進展したはずだから。

頭注は新たに二個所（120・140）添加されている。巻・丁付の訂正が三個所、語句や文字の訂正、脱字の補筆などが二〇数個所ある。

巻一・二に比して巻三以降の改変は比較的少ない。巻三（鳥部）の本文内容の改変としては98鶯の全文改訂と84牟佐佐婢の一部加筆がある。人名削除の例としては「蘭山云……云云」が「按ズルニ……ナリ考フベシ」と改変（49鷹）されて、内容は変らず、蘭山説をあたかも自説であるが如く見せかけている個所が相変わらず存在する。

逆に東洋本に「今思フニ」とあるのが「或人ノ云」と改変されている例（16大烏）もある。巻・丁付の訂正が三個所、文字・語句の訂正は六個所ある。

残る巻四から巻七までの相異点は巻三よりさらに少ない。本文内容の改変としては巻六（魚部）の7鮪の本文全面改訂、人名改変としては巻四（獣部）の15牡牛と巻六の14蛟龍の「蘭山」がそれぞれ「或人」、「先輩」に改訂されている例が挙げられる程度である。巻・丁付の訂正は二個所、文字の訂正は四個所である。

なお、『品類鈔』諸本の相異点を述べるに際して、字体の相異、仮名遣い（送り仮名）の相異、漢文体表記の訓点（返点及び送り仮名）の有無、漢字のルビの有無、濁点の有無などについての比較は省略した。

〈注〉

（1）『本居宣長全集』第十二巻、二七七頁参照。しかし、嗣興の宣長説引用は橘千蔭『萬葉集略解』からの孫引であろう。『略解』に「宣長云神樹かみきと訓べし、さかきとてはただ山に有さかきにまかひて此歌に叶はずといえり」（巻之四上・五一七歌解）とある。

（2）『古事記傳』三十之巻（訶志比宮上巻）に「凡て爾岐と阿羅とを對言こと多し、和多閇荒多閇、和稲荒稲、和海布荒海布、毛柔物毛麁物、などの如し」とある。（全集第十一巻　三八六頁参照）　萬葉集巻十六・三八七一の「和海藻」は現代の諸注釈書の殆が「ニキメ」と訓んでいる。

（3）杉本つとむ編著『小野蘭山本草綱目啓蒙本文・研究・索引』（昭和四十九年　早稲田大学出版部刊）の「研究」篇参照。

（4）木村陽二郎『江戸期のナチュラリスト』（一九八八年　朝日新聞社刊）第三十章「職業としての本草学――小野蘭山の名声」及び東洋文庫『本草綱目啓蒙Ⅰ』（一九九一年　平凡社刊）の解説「小野蘭山と『本草綱目啓蒙』」（木村陽二郎）参照。

（5）大場秀章『江戸の植物学』（一九九七年　東京大学出版会刊）第三章「『本草綱目』研究の完成――小野蘭山」参照。

（6）上野益三『日本博物学史』Ⅰ「日本博物学通史」第六章「近世二」の6「博物学者の著述」参照。

五

『萬葉品類鈔』は江戸期に成立した萬葉博物学書の中で、明治以前に出版された唯一の書である。その意味で歴史的意義があると言えよう。いったい、嗣興をしてこのような書を執筆せしめ、さらに出版までさせた契機は何であったのか。

第一に宣長の影響をあげたい。宣長は『玉勝間』十の巻で「よろづの草木鳥獣、なにくれもろ〳〵の物の事を、上の代よりひろめ委しく考へて、しるしたる書こそ、あらまほしけれ」「いかで古事記書紀萬葉集など、すべてふるきふみどもをまづよく考へ、中むかしのふみども、今の世のうつゝの物まで、よく考へ合せて、和名抄のかはりにも用ふべきさまの書を、作り出む人もがな」[1]と呼びかけている。五百代廣治の『品類鈔』序文は『玉勝間』十之巻の文章によく似ている。「物産ノ事」を主として熱心に学問する「稚子」が訪れて、『萬葉品類鈔』の草稿を見せたので閲読してみると自分が期待していたような書であったので大いに励まし、清書をすすめたというあたりは、宣長を訪問した越前の伊藤多羅が「おのが思ふにかなへるさまにて、考へも、よろしく見えしかば、これいかでおこたらずつとめて、しはてよ」と宣長からねんごろに激励されたという『玉勝間』の記事に酷似している。嗣興も「自序」で「竊謂二先哲有二詩経名物之解一、未レ聞レ有二萬葉集名物之解一」と述べ、萬葉集から草木鳥獣蟲魚介金玉服帛造醸器物船具を抜き出して考証、分類したのは自分が最初であると自負している。廣治・嗣興の二人には宣長の『玉勝間』の呼びかけにこたえているのだという意識があったのではなかろうか。宣長は嗣興の生まれる八年前（享和元年〈一八〇一〉）にすでに没しているが、同じ伊勢の先輩学者として、その名声を熟知していたであろう。『玉勝間』（第四編（巻十～十二）享和二年頃刊）なども当然読んでいたはずである。『品類鈔』の引用書の中で、宣長説を引用する回数は、国学者関係では真淵説についで多い。

次に、伊勢地方で萬葉研究に業績をあげた荒木田久老（延享三年〈一七四六〉～文化元年〈一八〇四〉）・久守（安永八年〈一七七九〉～嘉永六年〈一八五三〉）父子の影響をあげたい。この父子は内宮の神官（御師）である。久老の記紀万葉関係の注釈書としては『萬葉考槻落葉』（寛政十年〈一七九八〉刊）、『日本紀歌之解』（文政二年〈一八一九〉刊）、『信濃漫録』（文政四年〈一八二一〉刊）などがある。久老は動植物の考証にも深い関心を寄せていたが、特に前二著には博物学的見地からなされた記述が多い。動植物に関する考証は『槻落葉』で一三項目、『日本紀歌之解』で二二項目に及ぶ。本草書からの引用はないが、和名抄や契沖・真淵・宣長の説をあげて考証している。

久老の二男が久守である。久守の著書は多くない。むしろ、父の著述の校訂や出版に力をつくした。久老の没後、久守の努力によって出版された『信濃漫録』の巻末には「荒木田久守大人著述目録」が掲載されている。その目録の中に「萬葉集鳥獣草木考」という書名が見える。『国書総目録』などには書名があげられているが、久

老・久守関係の書を多く所蔵している神宮文庫・射和文庫などの蔵書目録には書名が存在しない。この書は結局著述されなかったのではなかろうか。ただ、射和文庫には荒木田久守編『萬葉草木類例』（第五門・い）が所蔵されている。この書は本文四八枚の小冊子で、内容も備忘録程度の自筆稿本である。久守はこの書を将来「萬葉集鳥獣草木考」に発展させようと意図していたのかもしれない。そして「著述目録」に加えたのではなかろうか。『萬葉集鳥獣草木考』は完成しなかったが、久守の萬葉集中の鳥獣草木に寄せる関心のほどがうかがわれる。久老の所説は『萬葉品類鈔』神宮本には三回引用されている。久老・久守父子の存在も嗣興に刺激を与えたのではなかろうか。

さらに、伊勢外宮権禰宜の家柄に生まれ、小野蘭山に就いて本草学を学んだと言われる春木煥光（明和四年〈一七六七〉～天保十四年〈一八四三〉）の存在などを同業者として知っていたであろう。著書としては『詩経名物訓解』（神宮文庫蔵）、『七十二候鳥獣虫魚草木略解』（国会図書館白井文庫蔵）などがある。むしろ、嗣興にとって最も身近な存在であったろう。その存在は嗣興にやはり大きな刺激を与えたであろう。

こうした周囲の状況と嗣興の幼少よりの「物産ノ学」に対する好奇心が『品類鈔』執筆へと駆り立てたのであろう。

最後に『品類鈔』の特色を二点あげておく。その一は見出し項目が各巻ごとに五十音順に配列されているという点である。「凡例」の最初には「其名コトゴトク類聚シテ今五十音ヲ以テ分チ卒検の便トス」とある。五十音順の配列は「卒検」に便利であり、ある時は辞書として、ある時は索引としての役割を果たす。今日の我々も十分活用し得る実用性を備えている。この五十音順の配列は本書以前の萬葉博物学書のなし得なかった新しい配列法である。そして、この配列法は鹿持雅澄の『萬葉集品物解』（明治二十四年刊）に継承されて、現代の萬葉古今動植物事典の原形をなしたと言えよう。

その二は構想だけに終わったが、嗣興は草木・鳥獣・虫・魚介から金玉・服帛・造酿・器物・船具までの分類・注釈を目指していたという点である。それは動植物といった自然界の品物のみならず、金玉・服帛・造酿・器物・船具といった人間社会の品物、産物までも視界に収めようとしたということである。「金玉」「服帛」「造酿」「器物」は『本草綱目』の分類基準の一部である。その意味で嗣興は『本草綱目』の世界観の影響下にあったと言えよう。また、「船具」は具体的にどんな内容を想定していたのか不明であるが、『和名抄』『新撰字鏡』などの分類に「舟車」（舟具・車具）があるから、あるいはそれらから来たものかも知れない。とすれば、これら古辞書の項目分類の影響も受けていたことになる。しかし、彼の構想は

未完成で終っている。結果として、草部では108苗、71下草、184若草、木部では26枝、55咲花（サクハナ）、76落花（ナルハナ）、127實（ミ）、鳥部では21覆羽（オホヒバ）、56鳥翔（フバサ）、73羽（ハ）、101尾、獣類では21角（ツノ）などといった、特定の品物を指すものではない項目や鳥・獣の身体部の名称を指す項目までも見出し語として含まれている。見出し項目数が他の萬葉博物学書に比して非常に多くなっているということである。また、巻七「介部」を「魚部」から別立てにしたのも嗣興の功績である。

終りに『萬葉品類鈔』（東大本）の私的に作成した「掲載項目目録」を付表（三）として掲出しておく。（「番号」は私に付した通し番号。「丁」は丁付。「神」は神宮文庫本の通し番号。「備考」は鹿持雅澄『萬葉集品物解』との対照。×印は該当なし。△印は複数項に掲出せる場合。）

〈注〉

（1）『本居宣長全集』第一巻「玉勝間」十の巻参照

（2）松島博『近世伊勢における本草学者の研究』（昭和四十九年講談社刊）第九章「その他の伊勢の本草学者」参照。

（わだ　よしかず／本学大学院生）

付表（三）

『萬葉品類鈔』（東大本）掲載項目目録

番号	見出し項目	仮名傍訓	丁	神	備考
		阿			
1	菖蒲	（アヤメグサ）	1	1	6、あやめぐさ
	一之巻	草部			
2	味狭藍	（アヂサヰ）	1ウ	2	4（木）、あぢさゐ
3	粟	（アハ）	2	3	4、あは
4	蓋	（アシ）	2ウ	4	2、あし
5	韮附	（アシヅキ）	4	5	3、あしつき
6	浅茅	（アサヂ）	4	6	47△、ちかや
7	葵花	（アフヒバナ）	4ウ	7	5、あほひ
8	有間菅	（アリマスゲ）	5	8	38△、すげ
9	秋芽子	（アキハギ）	5	9	62△、はぎ
10	秋草	（アキクサ）	6	10	×
11	秋花	（アキバナ）	6	11	×
12	蓬菁	（アヲナ）	6ウ	12	7、あをな
13	朝菜	（アサナ）	6ウ	13	×
14	阿良久佐	（アラクサ）	6ウ	14	×
15	麻	（アサ）	7	15	1、あさ

	意						宇										伊		
35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
奥津玉藻	息津藻	宇萬良	宇毛	宇家良我波奈	宇利	苑子水葱	宇波疑	伊牟多禰	妹爾似草	壺師花	伊波為都良	稲	石乍自	石綱	伊都藻之花	石穂菅	磐本菅	秋穂	青角髪
(オキツタマモ)	(オキツモ)	(ウマラ)	(ウモ)	(ウケラガハナ)	(ウリ)	(ウヌコナギ)	(ウハギ)	(イムタネ)	(イモニニルクサ)	(イチシノハナ)	(イハキヅラ)	(イネ)	(イハツツジ)	(イハツナ)	(イツモノハナ)	(イハホスゲ)	(イハモトスゲ)	(アキノホ)	(アヲミヅラ)
13下	13ウ上	13上	12ウ下	12下	12ウ上	12ウ上	12上	11ウ	11ウ	11	10ウ	10	9ウ	9	8ウ	8	8	8	7ウ
35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
77△、も	77△、も	14、うばら うまら	15、うも	12、うけら	16、うり	53、なぎ	13、うはぎ	9△、いね	×	8、いちし	10、いはゐづら	9、いね	(木)39△、つつじ	49△、つた	77△、も	38△、すげ	38△、すげ	×	×

	許						久	伎									加		
55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36
薦	蘿	屎葛	九君美良	九久多知	紅花	葛	草	寸三	可都良加氣	堅香子之花	彩草	垣津旗	容花	幹藍	苅薦	川藻	草	思草	於保為具佐
(コモ)	(コケ)	(クソカヅラ)	(ククミラ)	(ククタチ)	(クレナヰノハナ)	(クズ)	(クサ)	(キミ)	(カツラカゲ)	(カタカゴノハナ)	(カゲクサ)	(カキツバタ)	(カホバナ)	(カラアヰ)	(カリコモ)	(カハモ)	(カヤ)	(オモヒグサ)	(オホヰグサ)
26	25ウ	24ウ	24ウ	24	22ウ	21ウ	21	20ウ	20ウ	19	19	18	17ウ	16ウ	16	16	15	13ウ下	13下
55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36
31、こも	30、こけ	28、くそかづら	26、くくみら	7△、あをな	29、くれなゐ	27、くず	(11、うきくさ)	25、きみ(きび)	66△、ひかげ	20、かたかご	×	19、かきつばた	22、かほばな(かほばはな)	24、からゐ	31、こも	77△、も	23、かや	17、おもひぐさ	18、おほゐぐさ

	須									斯						佐			
75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56
須美禮	菅藻	子太草	知草	下草	柴	鬼乃志許草	白管仕	白菅	細竹爲酢寸	細竹	佐左良乎疑	佐禰加夜	櫻麻	佐由利	左和良妣	三枝	狭名葛	古奈伎我波奈	小菅
(スミレ)	(スガモ)	(シダクサ)	(シリクサ)	(シタクサ)	(シバ)	(シコノシコグサ)	(シラツツジ)	(シラスゲ)	(シノススキ)	(シノ)	(ササラヲギ)	(サネガヤ)	(サクラアサ)	(サユリ)	(サワラビ)	(サキクサ)	(サナカヅラ)	(コナギガハナ)	(コスゲ)
33ウ	33	32ウ	32	32	32	31	31	31	30ウ	29ウ	29ウ	29	28ウ	28	27ウ	27	26ウ	26ウ	26
75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56
40、すみれ	77△、も	35、しだくさ	37、しりくさ	×	36、しば	×	(未)39△、つつじ	38△、すげ	39△、すゝき		85△、をぎ	23△、かや	1△、あさ	80△、ゆり	84、わらび	32、さきくさ	33、さなかづら（さねかづら）	53△、なぎ	38△、すげ

登							都	智								多	勢		
95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76
冬瓜葛	都豆良	茅花	都保須美禮	土針	角	月草	茵花	茅	種	玉搥	多波美豆良	多麻古須氣	田草	玉葛	手向草	珠藻	芹子	菅	爲酢寸
(トコロヅラ)	(ツヅラ)	(ツバナ)	(ツボスミレ)	(ツチバリ)	(ツヌ)	(ツキクサ)	(ツツジバナ)	(チ)	(タネ)	(タマハハキ)	(タハミヅラ)	(タマコスゲ)	(タクサ)	(タマカヅラ)	(タムケグサ)	(タマモ)	(セリ)	(スゲ)	(ススキ)
41	40ウ下	40ウ下	40下	40ウ上	40上	39	39	38ウ	38ウ	37ウ	37ウ	37ウ	37	36ウ	36ウ	36	35ウ	34	34
94	93	92	91	90		89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76
52、ところづら	51△、つづら	47△、ちがや	40△、すみれ	50つちはり	49△、つた	48、つきくさ	39、つつじ	47△、ちかや	×	46、たまばはき	44、たはみづら	38△、すげ	×	45、たまかづら	×	77△、も	41、せり	38、すげ	39、すすき

泥		奴				爾												那	
115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96
禰自路多可我夜	野干玉	尊	仁比久佐	庭草	似兒草	丹菅士	苗	七重花	水葱	縄乗	靡藻	夏麻	夏葛	七相菅	名乗藻	石竹	夏草	菜	非時藤
(ネジロタカガヤ)	(ヌバタマ)	(ヌナハ)	(ニヒクサ)	(ニハクサ)	(ニコグサ)	(ニツツジ)	(ナヘ)	(ナナヘバナ)	(ナギ)	(ナハノリ)	(ナビキモ)	(ナツソ)	(ナツクズ)	(ナナフスゲ)	(ナノリソ)	(ナデシコ)	(ナツクサ)	(ナ)	(トキジクフヂ)
51	49	48ウ	48ウ	48ウ	47	47	47	46ウ	46ウ	45ウ	45ウ	45ウ	45	45	44	43	42ウ	42ウ	42
114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95
23△、かや	59△、ぬばたま	58、ぬなは	×	×	57、にこぐさ	(木)39△、つつじ	9△、いね	×	53△、なぎ	56、なはのり	77△、も	1、あさ	27△、くず	38△、すげ	55、なのりそ	54、なでしこ	×	×	69△、ふぢ

			比														波		
135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116
稗	姫由理	日賀菅原	菱	波保麻米	蓮	波麻都豆良	濱菜	春草	芽子	花勝見	濱荻	濱木綿	延都多	延葛	初尾花	波奈須爲寸	旗須爲寸	核[1]延子菅	根都古具佐
(ヒエ)	(ヒメユリ)	(ヒメスガハラ)	(ヒシ)	(ハホマメ)	(ハチス)	(ハマツヅラ)	(ハマナ)	(ハルクサ)	(ハギ)	(ハナガツミ)	(ハマヲギ)	(ハマユフ)	(ハフツタ)	(ハフクズ)	(ハツヲバナ)	(ハナズスキ)	(ハタズスキ)	(ネハフコスゲ)	(ネツコグサ)
61ウ	61	60ウ	60	60	59ウ	59	59	59	56ウ	56	56	55	55	54ウ	54ウ	53	52	51ウ	51ウ
134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	115
65、ひえ	80△、ゆり	38、すげ	67、ひし	71、まめ	63、はちす	51、つづら	77△、も	×	62、はぎ	21、かつみ	85△、をぎ	64、はまゆふ	49、つた	27、くず	40△、すすき	39△、すゝき	39△、すゝき	38△、すげ	61、ねつごくさ

			美						麻			富				布			
155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139	138	137	136
水陰草	水草	水蓼	水鷄	俟海松	眞鷄	麻紫	眞菊	眞菅	眞草	穂	穂蓼	保與	布流久佐	深海松	藤袴	藤	一村芽子	日影	蒜(蒜)
(ミツカゲグサ)	(ミクサ)	(ミツタデ)	(ミスズ)	(マタミル)	(マコモ)	(マソ)	(マクズ)	(マスゲ)	(マクサ)	(ホ)	(ホタデ)	(ホヨ)	(フルクサ)	(フカミル)	(フジバカマ)	(フヂ)	(ヒトムラハギ)	(ヒカゲ)	(ヒル)
68	67ウ	67	67	66ウ	66ウ	66	66	66	65ウ	65	64ウ	64	64	63ウ	63	62ウ	62	62	62
154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139	138	137	136	135
×	×	43△、たで	31△、こも	72△、みる	31△、こも	1、あさ	27△、くず	38△、すげ	39△、すゝき	9△、いね	43△、たで	57(未)、ほよ	×	72、みる	70、ふぢばかま	69△、ふぢ	62、はぎ	66△、ひかげ	68、ひる

				夜			母		米				牟						
175	174	173	172	171	170	169	168	167	166	165	164	163	162	161	160	159	158	157	156
玉蕨(山)	山藍	山橘	山菅	山振	母母余具佐	百小竹	藻	目不醉草	軍布	牟浪他麻	麥	紫草	牟具良	三鳥管	潮葦	御馬草	美留	美草	道之志婆草
(ヤマカヅラ)	(ヤマアヰ)	(ヤマタチバナ)	(ヤマスゲ)	(ヤマブキ)	(モモヨグサ)	(モモシノ)	(モ)	(メザマシグサ)	(メ)	(ムラタマ)	(ムギ)	(ムラサキ)	(ムグラ)	(ミシマスゲ)	(ミナトアシ)	(ミマクサ)	(ミル)	(ミクサ)	(ミチノシバクサ)
74	73ウ	73	72ウ	71ウ	71	71	71	70ウ	70	70	70	69ウ	69	69	69	68ウ	68ウ	68	68
174	173	172	171	170	169	168	167	166	165	164	163	162	161	160	159	158	157	156	155
66△、ひかげ	79、やまゐ	66(未)、やまたちばな	38△、すげ	64(未)、やまぶき	78、もゝよぐさ	89、しぬ	77△、も	×	76△、め	59△、ぬばたま	73、むぎ	75、むらさき	74、むぐら	38△、すげ	2△、あし	3(申)、うま	72△、みる	39△、すゝき	48、しばくさ

					衰	恵						和	余			由				
	194	193	192	191	190	189	188	187	186	185	184	183	182	181	180	179	178	177	176
計	苧原	荻	乎等古乎美奈能波奈	女郎花	美草	恵具	速稲	和可米	春菜	菅草	若草	弱薦	余母疑	湯種	百合	葬陰草	八重花	八穂蓼	八重六倉
一九四種	(ヲフ)	(ヲギ)	(ヲトコヲミナノハナ)	(ヲミナヘシ)	(ヲバナ)	(ヱグ)	(ワセ)	(ワカメ)	(ワカナ)	(ワスレグサ)	(ワカクサ)	(ワカコモ)	(ヨモギ)	(ユダネ)	(ユリ)	(ユフカゲグサ)	(ヤヘバナ)	(ヤホタデ)	(ヤエムグラ)(マヤ)
	80ウ	80ウ	80	79	78ウ	78	77ウ	77ウ	77	76ウ	76	76	75ウ	75ウ	75ウ	75	75	74ウ	74ウ
	193	192	191	190	189	188	187	186	185	184	183	182	181	180	179	178	177	176	175
	1、あさ	85、をぎ	×	86、をみなへし	39△、すゝき	81、ゑぐ	9△、いね	76△、め	×	83、わすれぐさ	×	31、こも	82、よもぎ	9△、いね	80、ゆり	×	×	43△、たで	74、むぐら

宇							伊											阿	
19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
梅	伊蘇麻都	伊佐左村竹	以都母等夜奈枳	石迹柏	伊智比	五十槻枝	五可新	秋葉	浅小竹原	阿布知	安加良多知婆奈	安可良我之波	梓	阿倍橘	秋柏	朝貌	背柳	馬酔木	二之巻
(ウメ)	(イソマツ)	(イササムラタケ)	(イツモトヤナギ)	(イハトガシハ)	(イチヒ)	(イツキノエダ)	(イツカシ)	(アキノハ)	(アササハラ)	(アフチ)	(アカラタチバナ)	(アカラガシハ)	(アヅサ)	(アベタチバナ)	(アキガシハ)	(アサガホ)	(アヲヤギ)	(アシビ)	木部
10ウ	10	10	10	9ウ	9	8ウ	8ウ	8	8	7ウ	7	6ウ	5ウ	5	4	2	2	1	
19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
8△、うめ	58△、まつ	(草)88△、ささ	63△、やなぎ	17△、かしは	7△、いちひ	43△、つき	21、かし	×	(草)89△、しぬ(あさしぬはら)	3、あふち	34△、たちばな	17△、かしは	2、あづさ	5、あべたちばな	17△、かしは	6、あさがほ	63△、やなぎ	1、あしび	

										加		意		延					
39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20
枳	可都良加氣	可伎都楊疑	可頭乃木	神杙	神樹	蝦手	川楊	樓皮	楓	樫原	於布之毛等	臣木	枝	椄賀	埋木	殖木	宇惠多氣	殖木橘	宇乃花
(カラタチ)	(カツラカゲ)	(カキツヤギ)	(カヅノキ)	(カミスギ)	(カミキ)	(カヘデ)	カハヤナギ	カニハ	(カツラ)	(カシハラ)	(オフシモト)	(オミノキ)	(エダ)(エ)	(エノミ)	(ウモレキ)	(ウヱキ)	(ウヱタケ)	(ウヱキタチバナ)	(ウノハナ)
22	21ウ	21ウ	21	21	20下ウ	19ウ	19ウ	18ウ	16	14ウ	14ウ	13ウ	13ウ	13	13	12ウ	12ウ	12ウ	12
39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20
18、からたち	14△、かつら	12、かきつやぎ	19、かづのき	32△、すぎ	×(27、さかき)	15△、かへるて	13、かはやなぎ	20、かには	14△、かつら	21、かし	×	11、おみのき	×	10、え	×	×	87(ス)、さすだけ	34△、たちばな	9、うなはな

								佐						許	氣		久	伎	
59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40
小竹	辟竹	刺竹	刺楊	咲花	左宿木花	櫻	賢木	狭野榛	古志波	許毛爾之波	兒手柏	許奈良	木	小松	毛桃	黒樹	久利	木	栢
(ササ)	(サキタケ)	(サスタケ)	(サスヤナギ)	(サクハナ)	(サネキノハナ)	(サクラ)	(サカキ)	(サヌハギ)	(コシバ)	(コモニシバ)	(コノテガシハ)	(コナラ)	(コ)	(コマツ)	(ケモモ)	(クロギ)	(クリ)	(キ)	(カヘ)
31	30ウ	30ウ	30ウ	30	30	29	28	28	27ウ	27ウ	27	27	24ウ	24ウ	24	24	23ウ	23	22ウ
59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40
88(ス)、ささ	(ス)87△、さすだけ	(ス)87△、さすだけ	63△、やなぎ	×	×	26、さくら	27、さかき	49、はり	×	×	25、このてかしは	46、なら	×	58△、まつ	61△、もも	×	23、くり	×	16、かへ

		都			智				多		須							斯	
79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60
槻木	椿	櫻木	落花	知智乃實	知左能花	燎木	竹	橘	玉松之枝	李花	杉	之伎美我波美	垂柳	林	椎	白樫弓	白杜栂枝	楚	小歴木
(ツキノキ)	(ツバキ)	(ツガノキ)	(チルハナ)	(チチノミ)	(チサノハナ)	(タキギ)	(タケ)	(タチバナ)	(タママツガエ)	(スモモノハナ)	(スギ)	(シキミガハナ)	(シダリヤナギ)	(シゲキ)	(シヒ)	(シラマユミ)	(シラガシノエダ)	(シモト)	(シバ)
41ウ	39ウ	38ウ	38ウ	38	37ウ	37ウ	37ウ	34ウ	34ウ	34	33ウ	33	33	32ウ	32	32	31ウ	31ウ	31
78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61		60
43△、つき	38、つばき	41、つがのき	×	37、ちち	36、ちさ	×	(オ)△9087、さすだけなよたけ	34△、たちばな	58△、まつ	33、すもも	32△、すぎ	30、しきみ	28、しだりやなぎ	×	31、しひ	59△、まゆみ	29、しらかし	×	×

		泥	奴	爾				奈					登						
99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80
根	合歓木	根蔓室木	野木	爾比具波	奈用竹	棗	成	楢柴	時花	常花	常葉之樹	時支久能香久乃菜子	乃我之樹	都萬麻	瓜木	婁梨木	橡	黄楊	柘
(ネ)	(ネブノキ)	(ネハフムロノキ)	(ヌギ)	(ニヒグハ)	(ナユタケ)	(ナツメ)	(ナシ)	(ナラシバ)	(トキノハナ)	(トコハナ)	(トコハノキ)	(トキジクノカクノコノミ)	(トガノキ)	(ツママ)	(ツマギ)	(ツマナシノキ)	(ツルバミ)	(ツゲ)	(ツミ)
47	46ウ	46ウ	46	46	45ウ	45	44ウ	44ウ	44ウ	44	44	44	43ウ	43ウ	43ウ	43	42ウ	42	41ウ
98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79
×	48、ねぶ	60△、むろのき	×	24、くは	(オ)△90、なよたけ(なゆたけ)	47、なつめ	45△、なし	51△、ははそ	×	×	×	34△、たちばな	41、つがのき	42、つまま	×	45△、なし	7△、いちひ	40、つげ	44、つみ

富					布			比											波
119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100
鉾椙	船木	冬木	冬柳	冬木梅	葛英	一松	檜原	久木	花	葉	春楊	濱松	濱久木	波自由美	波播蘇葉	榛	針原	波禰受	花橘
（ホコスギ）	（フナギ）	（フユキ）	（フユヤナギ）	（フユキノウメ）	（フヂノキ）（サイカシ）	（ヒトツマツ）	（ヒハラ）	（ヒサギ）	（ハナ）	（ハ）	（ハルヤナギ）	（ハママツ）	（ハマヒサギ）	（ハジユミ）	（ハハソバ）	（ハギ）	（ハリハラ）	（ハネズ）	（ハナタチバナ）
60	60	59ウ	59ウ	59ウ	58ウ	58ウ	57ウ	56ウ	55ウ	55	54ウ	54ウ	54	53	52ウ	50	49ウ	48	47ウ
118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99
32△、すぎ	×	×	63△、やなぎ	8△、うめ	×	58△、まつ	54△、ひ	55、ひさぎ	×	×	63△、やなぎ	58△、まつ	52、はまひさぎ	50、はじ	51△、ははそ	49△、はり	49△、はり	52、はねず	34△、たちばな

		夜						母			牟		美					麻	
139	138	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120
山萬苣	山海石榴	柳	黄葉	毛知	百樹	百木乃宇梅	毛武爾禮	桃樹	牟梅能波奈	結松	天木香樹	貫	三栗	麻之波	眞榛	眞弓	眞木	松	保寶我之婆
（ヤマヂサ）	（ヤマツバキ）	（ヤナギ）	（モミヂ）	（モチ）	（モモキ）	（モモキノウメ）	（モムニレ）	（モモノキ）	（ムメノハナ）	（ムスビマツ）	（ムロノキ）	（ミ）	（ミツグリ）	（マシバ）	（マハギ）	（マユミ）	（マキ）	（マツ）	（ホホガシハ）
69ウ	69ウ	69	68	67	67	67	66ウ	66ウ	66	66	65ウ	65	65	65	64ウ	63ウ	62ウ	61	60
138	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119
65、やまぢさ	38△、つばき	63△、やなぎ	×	×	×	8△、うめ	62、もむにれ	61△、もも	8△、うめ	58△、まつ	60△、むろのき	×	23△、くり	×	49△、はり	59、まゆみ	54△、ひ	58△、まつ	56、ほほがしは

		哀				
		149	148	147	146	145
計		小槻	和可麻都	和可加敝流氐	若歴木	若楓木
一四九種		(ヲツキ)	(ワカマツ)	(ワカカヘルデ)	(ワカクヌギ)	(ワカカツラキ)
		72ウ	72	72	72	71ウ
		148	147	146	145	144
		43△、つき	58△、まつ	15△、かへるで	55△、ひさぎ	14△、かつら

		和			由	
		144	143	142	141	140
		若木之梅	湯小竹	弓槻	弓弦葉	山櫻花
		(ワカキノウメ)	(ユザサ)	(ユヅキ)	(ユヅルハ)	ヤマサクラバナ
		71ウ	71ウ	71	71	70
		143	142	141	140	139
		8△、うめ	(耳)88△、ささ	43△、つき	68、ゆづるは	26△、さくら

		阿			
6	5	4	3	2	1
朝鳥	阿等利	秋沙	蒼鴨	蒲鶴	味
(アサドリ)	(アトリ)	(アキサ)	(アシガモ)	(アシタヅ)	(アヂ)
2ウ	2	2	1ウ	1ウ	1
6	5	4	3	2	1
×	×	1、あきさ	11△、かも	23△、たづ	2、あぢ

三之巻　鳥部

				意			宇			以						加	
17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	26	25	24	23	22	21	20
奥鳥	大鳥	鵠	鴉	鵜	伊保都登里	家鳥可鷄	斑鳩	古爾戀流鳥	安波禮能登里	朝鳥	烏	鴈	容鳥	鴨	加萬目	覆羽	念鳥
(オキツドリ)	(オホトリ)	(ウ)	(ウグヒス)	(ウヅラ)	(イホツドリ)	(イヘツドリカケ)	(イカルガ)	(イニシヘニコフルトリ)	(アハレノトリ)	(アサガラス)	(カラス)	(カリ)	(カホドリ)	(カモ)	(カマメ)	(オホヒバ)	(オモフトリ)
7ウ	6ウ	6	4ウ	4	4	3ウ	3	3	2ウ	2ウ	11ウ	10	9	8ウ	8ウ	8	8
17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	26	25	24	23	22	21	20
11△、かも	7、おほとり	4△、う	5、うぐひす	6、うづら	×	8△、かけ	3、いかるが	×	×	12△、からす	12、からす	13、かり	9、かほとり	11△、かも	10、かまめ	×	×

19	18	17	16	15	14	13
大黒	於保乎曾杼里	奥鳥	大鳥	鵠	鴉	鵜
(オホグロ)	(オホヲソドリ)	(オキツドリ)	(オホトリ)	(ウ)	(ウグヒス)	(ウヅラ)
8	7ウ	7ウ	6ウ	6	4ウ	4
19	18	17	16	15	14	13
22△、たか	12△、からす	11△、かも	7、おほとり	4△、う	5、うぐひす	6、うづら

		須									斯		佐	許	伎				
46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27
住鳥	渚鳥	菅鳥	四垂尾	之麻都等里	白鷺	白鳥	白鶴	此米	志許雅公鳥	志長鳥	之伎	狭野津鳥	坂鳥	許己呂奈伎登里	雉	生卵	潛鳥	可欲波等里	河千鳥
(スムトリ)	(スドリ)	(スガドリ)	(シダリヲ)	(シマツドリ)	(シラサギ)	(シラトリ)	(シラタヅ)(シラヅル)	(シメ)	(シコホトトギス)	(シナガドリ)	(シギ)	(サヌツドリ)	(サカドリ)	(ココロナキトリ)	(キギシ)	(カヒコ)	(カヅクトリ)	(カヨハトリ)	(カハチドリ)
16ウ	16ウ	16	16	15ウ	15ウ	15ウ	15	14ウ	14ウ	14	13ウ	13	13	13	12ウ	12	12	12	12
46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27
×	×	20、すがどり	×	4、△う	19、しらさぎ	18、しらとり	23、△たづ	17、しめ	29、△ほととぎす	16、しながどり	15、しぎ	14、△きぎし	×	×	14、△きぎし	×	×	×	24、△ちどり

																			多
	爾					那			登			都	智						
66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47
庭津鳥可鶏	二賓鳥	鳴鶏	鳴鴈	鳴鶴	鳴鴨	鳴鳥	飛鶴	鶏	鳥	鳥翔	鶴群	燕	千鳥	多杼里	多都登利	多知許毛	鷹	鶴	高部
(ニハツドリカケ)	(ニホドリ)	(ナクトリ)	(ナクカリ)	(ナクタヅ)	(ナクカモ)	(ナクトリ)	(トブタヅ)	(トリ)	(トリ)	(ツバサ)	(ツルムラ)	(ツバメ)	(チドリ)	(タドリ)	(タツトリ)	(タチコモ)	(タカ)	(タヅ)	(タカベ)
24ウ	24	24	23ウ	23ウ	23ウ	23	23	22ウ	21	21	20ウ	20ウ	19ウ	19ウ	19ウ	19	18ウ	17	17
66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47
8、△かけ	26、△にほどり	8、△かけ	13、△かり	23、△たづ	11、△かも	×	23、△たづ	8、△かけ	×	×	23、△たづ	25、つばめ	24、ちどり	×	×	11、△かも	22、たか	23、△たづ	21、たかべ

母		牟				美			麻		冨	比					波		奴
86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67
母智騰利	村鳥	牟佐佐婢	水鳥	水鴨	美夜故杼里	美沙	麻可母	眞白部乃多可	眞鳥	保追多加	翟公鳥	比婆理	羽	波麻渚杼里	始鴈	放鳥	春鳥	野鳥雉	宿兄鳥
(モチドリ)	(ムラトリ)	(ムササビ)	(ミヅトリ)	(ミカモ)	(ミヤコドリ)	(ミサゴ)	(マガモ)	(マシラフノタカ)	(マトリ)	(ホツタカ)	(ホトトギス)	(ヒバリ)	(ハ)	(ハマスドリ)	(ハツカリ)	(ハナチドリ)	(ハルトリ)	(ヌツドリキギシ)	(ヌエドリ)
32	31ウ	31ウ	31	31	30ウ	30	30	29ウ	29ウ	29ウ	27ウ	27ウ	26ウ	26ウ	26ウ	26	25ウ	25ウ	25
86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67
×	×	9(獣)、むささび	×	11△、かも	31、みやこどり	30、みさご	11△、かも	35△、わし	35△、わし	22△、たか	29△、ほととぎす	28、ひばり	×	×	13△、かり	×	×	14△、きぎし	27、ぬえとり

阿						袁	和		余		由				夜				
1				101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	
背馬	四之巻			尾	乎加母	鴦	鷲	夜鳥	呼兒鳥	行鶴	去鳥	矢形尾能多加	山翟公鳥	也左可杼里	山鳥	伯勞鳥	百千鳥	百鳥	
(アヲウマ)	獣部			(ヲ)	(ヲカモ)	(ヲシ)	(ワシ)	(ヨガラス)	(ヨブコドリ)	(ユクタヅ)	(ユクトリ)	(ヤカタヲノタカ)	(ヤマホトトギス)	(ヤサカドリ)	(ヤマドリ)	(モズ)	(モモチドリ)	(モモトリ)	計 一〇一種
1				36	35ウ	35	35	34ウ	34	34	34	33ウ	33ウ	33ウ	33	32ウ	32	32	
				101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	
3△、うま				×	11△、かも	36、をし	35△、わし	12△、からす	34、よぶこどり	23△、たづ	×	22△、たか	29△、ほととぎす	26△、にほどり	33、やまどり	32、もず	×	×	

都	多		志		佐		許		久	伎		加	於	宇	伊				
21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2
角	多都能馬	鹿猪	鹿	猿	竿牡鹿	牡牛	駒	黒馬	黒牛	狐	皮	鹿	大口眞神	馬	犬	荒熊	聰馬	赤駒	背駒
（ツノ）	（タツノマ）	（シシ）	（シカ）	（サル）	（サヲシカ）	（コトヒノウシ）	（コマ）	（クロウマ）	（クロウシ）	（キツ）	（カハ）	（カ）	（オホクチノマカミ）	（ウマ）	（イヌ）	（アラクマ）	（アシゲノウマ）	（アカコマ）	（アヲコマ）
11	10ウ	9ウ	9ウ	9	8ウ	8	6ウ	6ウ	6	6	5ウ	5ウ	5	4	3ウ	3ウ	2ウ	2	2
20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
×	3、△うま	4、△か	4、△か	7、さる	4、△か	2、△うし	3、△うま	3、△うま	2、△うし	5、きつ	×	4、△か	×	3、うま	1、いぬ	6、くま	3、△うま	3、△うま	3、△うま

			袁	由	牟	美	麻		布		波	奈	登		加	宇	阿		
		33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	4	3	2	1		
計		乎佐蕪	小牡鹿	往鹿	牟麻能都米	美麻	馬	布都麻	臥鹿	放駒	波由馬	鳴鹿	虎	養蚕	川津	虚木綿	秋津羽	五の巻	
三三種		（ヲサギ）	（ヲシカ）	（ユクシカ）	（ムマノツメ）	（ミマ）	（マ）	（フツマ）	（フスシカ）	（ハナチゴマ）	（ハユマ）	（ナクシカ）	（トラ）	（カフコ）	（カハヅ）	（ウツユフ）	（アキツハ）	蟲部	
		13	13	12ウ	12ウ	12ウ	12	12	12	11ウ	11ウ	11ウ	11	2ウ	1ウ	1ウ	1		
		31	30	29	28	27	26	25		24	23	22	21	4	3	2	1		
		10、をさぎ	4、△か	4、△か	×	3、△うま	3、△うま	3、△うま	4、△か	3、△うま	3、△うま	4、△か	8、とら	6、△くはこ	4、△かはづ	×	1、あきづ		

		牟	麻	留	比			那	多	須	佐		許		久				
		18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5				
計		蟲	麻欲	蛍	日晩	鳴蟬	鳴蝦	夏蟲	多爾具久	須輕	五月蠅	許	蟋蟀	桑子	久毛	六之巻	伊	阿	
一八種		(ムシ)	(マヨ)	(ホタル)	ヒグラシ	(ナクセミ)	(ナクカハズ)	(ナツムシ)	(タニグク)	(スガル)	(サバヘ)	(コ)	(コホロギ)	(クハコ)	(クモ)	魚部	2	1	
		9	8ウ	8	7ウ	7	7	6ウ	6ウ	5	5	4ウ	3	3	2ウ		1ウ	1	
		18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5		2	1	
		×	6△、くはこ	16、ほたる	15△、ひぐらし	15△、ひぐらし	4△、かはづ	×	13、たにぐく	11、すがる	14、はへ	6△、くはこ	8、こほろぎ	6△、くはこ	7、くも		鯨魚	年魚	
																	(イサナ)	(アユ)	
																	2、いさな	1、あゆ	

		和	牟	美	布	比	那	都	多	須	志	久	加	意	宇				
		16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3				
計		和可由	武奈伎	蛟龍	鮒	氷魚	奈	都奈之	鯛	鈴寸	鮪	屎鮒	堅魚	於可美	宇乎	七之巻	阿		
一六種		(ワカユ)	(ムナギ)	(ミヅチ)	(フナ)	(ヒヲ)	(ナ)	(ツナシ)	(タヒ)	(スズキ)	(シビ)	(クソブナ)	(カツヲ)	(オカミ)	(ウヲ)	介部	(アヤシキカメ)	(アハビダマ)	
		6ウ	6	6	5ウ	5	5	4ウ	4	4	3ウ	3	3	2ウ	2		1ウ	1	
		16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3		2	1	
		1△、あゆ	9、むなぎ	17(虫)、みづち	8、ふな	×	×	7、つなし	6、たひ	5、すずき	4、しび	8△、ふな	3、かつを	×	×		5△(虫)、かめ	2△(虫)、あはび	

伊	宇	加			期		美	和				
3	4	5	6	7	8	9	10	11				
磯貝	打背貝	龜	河爾	貝	四時美	小螺	蜷	忘貝	計			総計
(イソガヒ)	(ウツセガヒ)	(カメ)	(カニ)	(カヒ)	(シジミ)	(シタタミ)	(ミナ)	(ワスレガヒ)	一一種			五二三種
1ウ	2	2ウ	2ウ	2ウ	3	3	3ウ	3ウ				
3	4	5	6	7	8	9	10	11				
(虫)△2、あはび	(虫)12、せがひ	(虫)△5、かめ	(虫)3、かに	×	(虫)9、しじみ	(虫)10、しただみ	(虫)18、みな	(虫)19、わすれがひ				

（備考欄『万葉集品物解』の項目の上の数字は私に付した通し番号である。）

〈注〉

（1）「核ノ字根ノ誤ナルベシ」と注記あり。

（2）「森の字は蒜の誤欤」と注記あり。